

会津藩の三浦半島警備とブラザース号来航

十八世紀後半になると、日本近海で異国船を目にする機会が増え、幕府は今までの海岸防備を見直さなければならぬ状況になっていました。

この問題に最初に注目したのは、「寛政の改革」を実施した老中松平定信（まつだいらさだのぶ）でした。定信は寛政五年（一七九三）江戸湾防備のため近海を検分し、浦賀では奉行所の役人の操船訓練を見、船手組向井政香（むかいまさか）の稽古船にも乗りましたが、警備船を増やすとか台場を建設するというような成果を出さぬまま職を退いてしまいました。

会津藩の登場

本格的に江戸湾の防備についたのは、文化七年（一八一〇）幕府の命をうけて三浦半島に着任した会津藩からでした。会津藩は横須賀市鴨居と三浦市三崎に陣屋を置き、観音崎、浦賀の灯明堂の背後にある平根山、城ヶ島

の安房崎へ台場を建設し、守りに着きました。

会津藩の三浦半島勤務は永劫に続くものと思っていたので、家族をすべて連れてきていました。この地で亡くなる方も多く、現在でも会津藩士の墓碑がたくさんあります。

また、会津藩を縁の下で支えていたのは、三浦半島の農漁民でした。警備船の操船や陣屋・台場への手伝いは村に課せられた役目であり、これらの手伝いは農漁民にとっては負担になっていました。

ブラザース号来航

会津藩が防備についてから八年後の文政元年（一八一八）五月、イギリスの商船ブラザース号が浦賀沖へ来航しました。この船にはゴールドン船長以下九名が乗り組んでおり、インドのベンガルからロシアへ商売に行く途中立ち寄ったものでした。

船の大きさは長さ18 m、幅4 m、深さ3 mほどで、日本の船にすれば五百石船程度の小さなものでした。黒塗りの船体の中ほどに一筋の白い線があり、波があたりところより下には銅が張ってありました。

船は小さいのですが、外洋を航海するので、海賊から身を守るために大筒二門、ピストル四丁、鉄砲二丁の武器を所持していたので、停泊中は浦賀奉行所がこれらの武器類を預かりました。

異国船を間近に見た人たちは大いに興味をしめし、さまざまな記録を残しています。まず最初はマストです。帆柱は二本でスライド式になっていることに注目し、「港に入る時などは丈を縮めることができ、日本の釣りざおのよう」と記し、さらに「帆柱の上には二人ほど乗れるようになっていて、登り降りには縄ばしごを使用する」など細かな観察をしています。また乗組員に対しては「異人の顔は白く、目は浅黄色で、髪の毛・ひげ・まゆ毛まです赤く、鼻すじがとおり」、「背丈は六尺ぐらいあり」、「みな紺の筒袖の羅紗を着て」いるなど、はじめてみる異国人に対して、恐怖心よりも好奇心がはるかに勝っていました。(了)

※会報紙「よこすか開国史かわら版」掲載時の題名は、「泰平の眠りを覚ます上喜撰」でした。